

仕事人秘録

1994年に心臓発作で倒れ、半年近く入院した。

講演している最中に目まがいや視界が暗くなる体の異変が起きた。交通事故で歩けなくなってから17年。再び生死の境目をさまようことになった。発作の原因は交通事故の大きいの後遺症。傷だらけの体を長年酷使してきた結果だった。

入院生活から復活して仕事を再開したが、常に薬を持ち歩き、頻繁に医師の診察を受けるようになった。おのずと死を意識し始めた。47歳で亡くなった母の年齢に近づいていた。

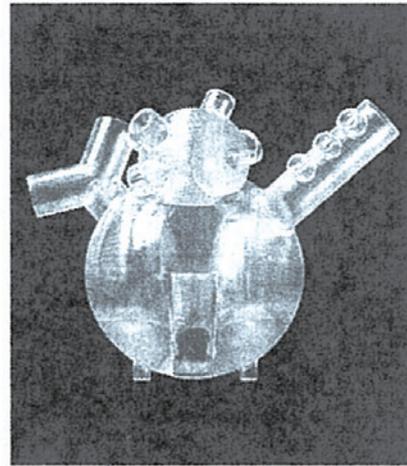
このころ、デザイン界では大きな賞である国井喜太

未来の予感を形に

①

工業デザイナー

川崎 和男氏



デザインした人工心臓

心臓発作経て「命」テーマに

学部の研究者の協力のもとで動物を使った実験を進めている。高度な安全性が求められるため、短期間で実用化できるわけではない。時間はかかるだろうが、地道に続けていこうと思う。すぐ実現すること、すぐ流行することほど廃れるの思いが膨らみ、デザインによって平和に貢献する活動ができないかと考えるようになった。

た。人工心臓のデザインは、気まぐれな消費者に振り回されるデザインほどそうなりがちだ。私はやりや廃りとは無縁のデザインを続けて行こうと思

「人工心臓を作れる」と米フィラデルフィア大学で言ってしまったこともあり、背水の陣で取り組んだ。人工心臓のデザインを通じて医療分野の人々と交流し、人命を守る現場に思いを寄せる機会が増えた。そ

「ピース・キーピング・デザイン(PKD)」と名付けて続けている。日本は世界の平和に貢献しなければならぬ。工業デザイナーとしての経験も役立てたいと願っている。